第二講 〈論説〉 現代社会論・メディア論・記号論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

美白、顔黒、茶髪、目力。近頃、化粧にまつわる新語や流行語が目立っている。それだけ人々の関心が化粧に向いているということなのだろうが、むろんすべての人々が化粧を歓迎しているわけではない。とりわけ電車内で化粧をする若者には、「良識ある大人」からの冷ややかな視線が注がれる。

[1]若者はなぜ、人前で堂々と化粧ができるようになったのか。彼らがこの「不可解」で「恥知らず」な行為を行えるようになるには、まず化粧品そのものが大幅に変化せねばならなかった。九〇年代に、化粧品は単なる化粧の道具というよりも、明確なメッセージをもつモードとなったのである。

モードとは何か。*高橋源一郎によれば、モードとは「半」小説である。すなわち、主人公の顔のない小説、「読者参加」型の小説であって、読者（受け手）が「読む」ことによって初めて完成される作品である。化粧品がモードになったということは、[2]化粧品もまた読者が「読む」ことによって完成される作品になったことを意味する。 A 、モードになった化粧品を人々はどのように「読んで」いったのだろう。

スーパーモデル・ブームはモードという「半」小説を、規制緩和は化粧品の「大型書店」を消費者にもたらした。メーキャップ・アーティストによってプロデュースされた化粧品とそれらを自由に試して買える空間が与えられたのである。もはやデパートや町の化粧品店で、美容部員から薦められた化粧品一式を買わされることもない。心ゆくまで「立ち読み」してから、好きな化粧品を組み合わせて買えるのだ。

 B 、ひとりの受け手としてモードを「読み」、積極的に関わっていくのは容易（たやす）いことではない。衣服のように、どのブランドの、どのアイテムを、どのように組み合わせるのか、という「着こなし」が至上命題となった。ファッション誌には化粧品の「着こなし」方が溢（あふ）れ、化粧情報専門の月刊誌も数多く創刊された。「読むコスメ」などというキャッチコピーで登場した各誌はいわば化粧品の「読書案内」である。

お洒落（しゃれ）な人のセンスある着こなし。ファッション誌では使い古されたフレーズもことが化粧となれば新鮮に映った。そのなかで「着こなし」の指南役として重宝されたのが、メーキャップ・アーティストや美容ジャーナリストだった。本来は裏方であった彼らの活躍により、化粧品を組み合わせ、顔に載せるという化粧行為は、化粧品の「読み」として人々のパブリックな場面に入り込んでいったのである。

化粧品の「読み」には素人も積極的だった。コスメフリークと呼ばれるモードの積極的な読み手もメディアに顔を出し、自らの選んだ化粧品や化粧法を公開し始めたのだ。誌上では選んだ化粧品を手に微笑む読者の記事が定番となり、彼らはなぜこの化粧品を選んだのかを熱っぽく語っている。「何も特別なことはしていない」と明言することが美徳であり、化粧が身だしなみや欠点を隠すものと考えられていた時代は過去のものとなった。

今や化粧は「読み」の行為なのである。化粧品を「読み」こなしていくこと、化粧品を「着こなせる」ことが称賛に値するのだ。だが化粧品を「読み」、「着こなす」ことを通して、彼らは何を求めているのだろうか。「きれいになりたい。」「センスがあると思われたい。」雑誌のタイトルになるほど常套句と化した言葉の裏にはいったい何があるのか。

メディアで「化粧センス」があり、「きれい」の第一人者として評価されている女優の山咲千里は、自らの化粧を「フェイス・コミュニケーション」であると言う。それは山咲が常に見せる自分であろうとし、化粧を主体的な、他者に積極的に働きかける行為として捉えているからだ。おそらく、ここでいう「化粧センス」とは、自分で自分を思い通りに見せられるということなのである。[3]今日はガングロでチャパツな私。明日はビハクして、メヂカラのある私というように。そして「きれい」とは身体の成形を通して、自己を成形できる者に対する賛辞なのである。［ C ］、化粧行為の過程を見せることは、恥でも何でもなく、単に自己を成形する過程を見せることであって、「化粧センス」の誇示にすぎないのだ。

［ D ］、「化粧センス」を誇示しあうのに顔そのものを見せる必要はないかも知れず、現にインターネット上ではコスメフリーク同士が顔を見せずに化粧を語りあうという[4]自己目的的な化粧行為を行っている。ネットで「おすすめコスメ」を書き込むコスメフリーク。フリークが選び抜いた化粧品は、彼らが化粧により完成させた顔よりも饒舌（じょうぜつ）に、彼ら自身を語るかもしれないのだ。

そういうわけで、電車の中で読書するように化粧する若者を一概に咎（とが）めることはできない。少なくともどちらも［ X ］

から。

（米澤泉『饒舌な化粧』「言語」11月号、第30巻第12号、大修館書店より）

（注）

＊高橋源一郎――小説家・評論家。一九九二年に刊行された『文学じゃないかもしれない症候群』で、作者が主人公の顔を書き入れる「ふつうの小説」に対し、「モード」は読者が自分でその主人公の顔を書き入れることによって完成する「半」小説だと論じている。

問1　傍線部1「若者はなぜ、人前で堂々と化粧ができるようになったのか」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　化粧が主体的でかつ他者に働きかける積極的な行為として解釈されるようになったことで、化粧行為と電車内の乗客との間に、作品と読者という関係が生じているから。

イ　自分が流行の最先端を行き、しかもその流れを正しく解釈していることを示す有効な手段の一つとして、化粧という行為が世間で一般的に認知されるようになったから。

ウ　多くのメーキャップ・アーティストや美容ジャーナリストが活躍したことで、素人もその「読み」の行為に積極的に加わることが可能となる環境が整備されたから。

エ　化粧をした顔が他者に見られることで完成する作品としての地位を築いたことで、化粧という行為自体も他者に見られることを前提としたものへと変化して行ったから。

オ　若者の間で化粧行為が自己表現の一つとして認められるようになったことで、欠点を隠すための恥ずべき行為としての認識が薄れたから。

問2　傍線部2「化粧品もまた読者が「読む」ことによって完成される作品になった」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　ファッションや化粧法だけでなく、化粧品までもが流行の一部として組み込まれてしまったため、その流行を積極的に「読む」ことが求められるようになったということ。

イ　流行の化粧品を身につけたモデルとその化粧品を買う側との間に、小説家と読者の関係に極めて類似した関係が生じたということ。

ウ　化粧品と化粧法が多様化したことで、小説の読解と同じように、化粧品の使用法にも個々人の解釈の違いが生じ、人々がその違いを積極的に楽しむようになったということ。

エ　自分を小説の主人公に重ねて楽しむように、様々な化粧品もその効果・効能を理解し、それらを自分に当てはめて楽しむものになったということ。

オ　明確なメッセージを持つ化粧品を使用した化粧は、周囲の人々がそれに込められた意図を正しく読み取ってくれて初めて、作品としての意味を持つようになったということ。

問3　空欄［A］～［D］に入る接続表現として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。ただし同じ選択肢を二度用いてはならない。

ア　だが　　イ　いやしくも　　ウ　そのうえ　　エ　だから
オ　なかんずく　　カ　だとすれば　　キ　では　　ク　にもかかわらず

問4　傍線部3「今日はガングロでチャパツな私。明日はビハクして、メヂカラのある私」にはどのような心情が表れているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　流行する様々な化粧を使い分けることで、異性に積極的に働きかけようとする気持ち。

イ　本来の姿ではないことは認めつつも、自分を可愛らしく見せようとする健気な気持ち。

ウ　自らの化粧センスを披露しつつ、自分のイメージを様々に演出することを楽しむ気持ち。
エ　普段は見せない自分の内面を一時的にさらけ出すことで得られる解放感を味わう気持ち。
オ　いろいろな化粧を試し、自分の個性に合った化粧法を模索しようとする積極的な気持ち。

問5　傍線部4「自己目的的な化粧行為」の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア　実際に化粧品を使用して自分を「きれい」に見せるというかつての化粧の目的が忘れられ、モードを「読む」ことが主目的にすり替わっているが、それも化粧行為の一種として認められるということ。
イ　豊富な商品知識や美的センスを語るだけでも、自分を「きれい」に見せる効果を生むため、実際に化粧をして見せるのではなく、語ること自体が目的になってしまっているということ。
ウ　化粧本来の目的を見失った一部のフリーク達が、モードの「読み」に関して情報交換をするだけで満足してしまい、実際に自分が化粧をすることは二の次になっているということ。
エ　モードを「読む」ことだけに没頭し、かつての化粧の目的を忘れているため、ネット上でいくら化粧品について議論しようとも、それは単なる自己満足の化粧行為にしかならないということ。
オ　情報交換をするという本来の目的を忘れ、自己の化粧センスを披露することが目的になっているが、自分を実像以上に良く見せるという点ではそれも化粧行為の一種として認めざるを得ないということ。

問6　空欄 X に入る表現を十字以内で記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

第二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　米澤泉＝よねざわ　いずみ（一九七〇〜）京都府生まれ。同志社大学文学部卒、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位習得退学。甲南女子大学准教授。ファッション文化論、化粧文化論などが研究テーマ。著書『電車の中で化粧する女たち』『「女子」の誕生』『女子のチカラ』など

語句

至上＝しじょう→絶対的な第一の価値
命題＝めいだい→果たすべき課題、やりとげるべき目標。学術的には「AはBである」という形で明言されたもの
指南＝しなん→理論や知識に基づいて基礎から指導、手ほどきすること
フリーク→異常なほどのめりこんでいるマニア
定番＝ていばん→時流に左右されない基本形態のもの
美徳＝びとく→ほめられるべき良い点　対義語…悪徳
常套句＝じょうとうく→決まり文句
賛辞＝さんじ→ほめ言葉
誇示＝こじ→アピールすること
饒舌＝じょうぜつ→話題が尽きず、おしゃべりなこと　cf.雄弁（ゆうべん）→説得力あるしゃべり
咎める＝とがめる→あやまちや欠点を指摘すること

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

		①	②	③	④	⑤
（ア）	不カ解な事実に直面する	過	架	可	渦	加
（イ）	お洒落がシ上命題になる	至	史	市	試	私
（ウ）	電車で化粧をカン迎しない	歓	感	観	敢	勧
（エ）	従来の規制をカン和する	監	環	管	緩	寒
（オ）	美ヨウ部員の説明を受ける	容	用	洋	庸	養
（カ）	新しい情報誌を創カンする	漢	刊	監	関	還
（キ）	将棋の基本を指ナンする	何	難	軟	南	納
（ク）	秋服の定バン商品を求める	盤	版	番	蛮	板
（ケ）	見事な作品に賛ジが集まる	字	事	辞	慈	児
（コ）	お決まりのジョウ套句を使う	上	城	醸	場	常

第二講　模範解答

問1　オ

問2　エ

問3　A キ　B ア　C カ　D ウ

問4　ウ

問5　イ

問6　「読み」の行為なのだ

復習問題　第二講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）②　（キ）④　（ク）③　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）不可解　（イ）至上　（ウ）歓迎　（エ）緩和　（オ）美容
（カ）創刊　（キ）指南　（ク）定番　（ケ）賛辞　（コ）常套句